研究所だより

榎本　木綿

瞬く間に師走です。今年もいろいろなことがありました。年の初めに今年こそ計画を立てて成し遂げようと心に誓うのに、どうしてこうも毎年、毎年、歳の瀬に後悔や反省ばかりしているのか…。やり残したことがたくさんあるまま、2013年も去っていきます。

今年は東アジア近隣諸国との関係悪化を背景に、米国主導のTPP交渉参加や特定秘密保護法が成立した年でもありました。先日の秘密保護法成立直前の国会前のデモには、反対するたくさんの人たちとともに連日参加しましたが、叫び声むなしく、国民の民意をまるで無視した結果となりました。国会での十分な議論もされず、公聴会で一般市民から出された慎重な審議を望む声や廃案への意見を無視し、これほどにも主権者を馬鹿にした安倍政権に対しての怒りとともに、この政治を生み出した私たち国民の無責任さにも腹がたちました。

戦争による他国侵犯や核兵器による被曝体験をもつこの国で、ひと昔前にはおじい、おばあの世代が戦争をしらない私たちの世代に、戦争の残酷さや国家、軍事政権のおそろしさをつぶさに、口すっぱく伝え続けてきました。忘れ去りたい過去であっただろうに、次の世代へ伝えるということが生き残った者たちが背負った重すぎるほどの責任と役割だったのだと思います。私たちはそれを受け継いだはずなのに、なぜこうしたきな臭い空気をまたも許しているのか。本法が成立したこの夜、民主主義が終わったのだと感じました。

民主主義は一人ひとりの尊厳の尊重であり、多数決ではありません。時として、真実や護るべきものが少数にあること、そして、異なる意見や少数の声が発せられることこそが価値ある社会なのだと思います。数を重んじた集団による民主主義ではなく、異なる考えを持つ人びとが対等に議論を交わし、相互の違いを理解し、受け止め合うことができる、より開かれた、自由な民主主義を求めてきました。これを実現するにはどうしたらよいのか？自分たちの足もとの日常から実践し、積み重ねていくほかないのではないでしょうか。

ややもすると、私たちは大きく発せられた声が“正しい”と従いがちです。秩序や常識を求める集団による無言の圧力と共に、様々なツールによって得られたニュースや知識がそれを後押しし、あたかも自分が正しい選択をしたかのような錯覚を植えつけます。しかしそこには、絶対的に不可欠な「自分自身で考える」という行為が抜け落ちており、他人任せにして責任を放棄してはいないでしょうか。

自分で考えるということには実感を伴った経験、とくに生活者としての経験が重要だと私は考えます。自分の想いや、やりたいと思うことから出発して、現実の世界でいろいろと経験し、得られた様々なこの実

感こそが、自分自身の一部となり、「私」をつくりだし、そこから個々人の考えがつくられるのだと思います。逆に、自分の想いのない単なる体験も無意味です。

本当の意味での民主主義を創り出すには、一人ひとりが数に負けず、権威に屈せず、自分が想い、体験し、実感したことからものごとを考え、人へ伝えることから始まるのだと思います。政治も、社会も私たちの日常から変えていくしかないのだと思います。この一件で、私の敵は私自身のなかに在るのだと思いました。

さて、こんなふうにここでつぶやくのもこれが最後です。年明けからは協同総研からワーカーズコープの現場へ異動となりますが、入所以降、たくさんのすてきな人たちに出逢い、いろんなことを学ばせてもらいました。キラキラした総研での日々には、私がやりたいと想い、考え、行動したその経験と実感が私自身の身にしっかりと根付いています。支えてくださった皆さんに心から感謝です。

もう少しすると新しい年の幕開けですね。来年はどんな人びとに出逢えるでしょうか。ワクワクします。そしてまたどこかで、皆さんに再会できる日をたのしみにしています。